

---

# キミと共に ...

ひさ \*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミと共に . . .

### 【Nコード】

N3470M

### 【作者名】

ひさ \*

### 【あらすじ】

家族で朝食を食べていた、その時・・・  
ガシャーーン！と物音がしたと思うと、  
その同時にメスの子羊・フェンリルが叫び鳴く。  
変に思い、羊小屋に行ってみると・・・

## 悲劇の幕開け 2 (前書き)

さあ、パート2がやってきましたよ (^ ^) /

ぱちぱちぱ... (殴

それでは早速下へ



ドドドドドドド

「リシエアリーグ団だ！ー逃げる！」

村の門のあたりから、

村人の叫び声が聞こえる。

リシエアリーグ団・・・？

どこかで聞いたことがあるような・・・。

だが、まだ10才と若いシエルには、  
到底理解のできることはなかった。

リシエアリーグ団…

戦争にて、古き時代から伝説をつくり続けてきた。

ほぼ全ての村が力強きリシエアリーグ団を認めていた。  
ところが・・・

ある年のこと…、このグループの総帥である、

“ ペアシユ ” の心が壊れたという噂が流れた。

というのは、妻を目の前にして無くしたペアシユは、  
希望を無くし、もはや絶望の世界に立っていた。

このあたりで一時停止します。

すみません。本当にすみません。

## 第0章 - 悲劇の幕開け 1 (前書き)

小説を読む前に・・・

どうもこんにちは、ひさ \*と申します。

この小説は奥深いファンタジー系に仕上げたいと思っておりますが、小説を読む前に、警告を記入しておきますね。

・小説の上手いか下手かどうかはスルーして下さい・・・

自分でもまだ、一流どころか三流であるとは思っていません。

読みやすく、面白い、続きが読みたくなるような小説を目指して、日々精神していきたいと思えます。

警告・・・といっても、こんな感じですかね・・・

また、コメント&アドバイスは永遠に募集しますので、

「ここおかしくないか?」と思った所があれば、教えて下されば、と思えます。

よく読んで理解して頂けた方は、お進み下さい・・・

## 第0章 - 悲劇の幕開け 1

### 0章 - 悲劇の幕開け

「んん．．．もう朝．．．か．．．」

カーテンの隙間から漏れる朝日の光にシエルは目を覚ました。  
そして少しばかり、重苦しい表情を浮かべる。

1人ぼつちでさびしい生活にも、もうすっかりと疲れきっていた。  
なんである時、僕だけ助かったのだらう．．．  
いつもいつもそんな風に思い続け、暗い人生を送っている。  
いくら願っても、もう戻って来ない。大切な家族。

今からちょうど、2年前くらいだろうか．．．  
何気ない幸せに囲まれた家族を、事件が引き裂いた。

シエルは元々、飼っていた子羊を含めて、5人家族だった。  
父親のレフェム、母親のリーチャ、妹のチエル、メスの子羊のフェ  
ンリル．．．  
そして自分、長男のシエル。  
家族全員揃って、朝食の時．．．

バーーーーンッ！「メエエエエエエ！！」  
「きゃっ!?!」ガシャン．．．

フェンリルが突然吼えるように鳴いた。

それもあるが．．．何だか不吉な物音も聞こえる。

その弾みで、チエルがイチゴジャムのピンを落とす…

ジャムは、フローリングの床に、ベチャッと不気味な音を立ててこ

ぼれた。

「いやあああ！ジャムがあー！ー！」

妹は涙目で叫び、泣き崩れた。

何にせよ、妹の好物の、リーチャが作ったイチゴジャムがこぼれたのだ。

そんな妹を見て、リーチャは慌ててこう告げる。

「チエル、落ちついて。また後で作ってあげるから…ね？」

すると、チエルの崩れた顔はすぐ元に戻り、

「絶対だよ！約束だよ！」

と、強く訴える。相変わらず、気変わりの早い妹だ。

そんなチエルを見て、リーチャは、はいはい。と呆れたように言う。

自業自得だというのに…とは思ったものの、妹はまだ9才。

大好物が目の前で失われるということとは、少しキツイようだ。

叫びたくなる気持ちも、分からなくもない。

「それはそうと…」

レフェムが会話をさえぎった。

「フェンリルのことも心配だな…あの変な物音は何だったのだろうか。嫌な予感がする」

リーチャは、そうね。と言うかのように頷いた。

そういえばそうだ。変な物音とフェンリルの泣き声はほぼ同時。

その2つの音は、何か関係があるに違いない…

これは異常だ。異常すぎる。

「とにかく、フェンリルを見てくる。皆はここで待っている。」

レフェムはそう告げて、庭にある、羊小屋のドアを開ける。

今はレフェムを信じるしかない…3人は待っていることにする。

そして…両手を前で組、目をぎゅっと瞑って、何事も無かったかのように

無事であることを祈る。今はそれしか自分にできることはない…。

「フェ・・・フェンリル!!!!!!!!!!」

この状況をよく把握していないチエルがサクツとパンをかじった途端…

レフェムの声が聞こえる。勢いで、大きく体を振るわせる。

「どうやら・・・」

間違いなく何かあったようだ。

「父さん!!!」

シエルに続き、リーチャ、チエルも駆けつける。

羊小屋の前に着くと、レフェムは腰を抜かしていた。

顔を真っ青にして口をぽかんと開いたまま、地べたに座り込んでいる…

そして、震えた人差し指だけを懸命に伸ばしている…

差している指の先には…

「フェ・・・フェン・・・フェンリ・・・ル・・・」

血まみれのフェンリルが横たわっていた。

そんな・・・バカな……

羊飼いの優しい親戚から授かった、1つの小さな命・・・

それが、フェンリルだった。

フェンリルは生れつき、おしゃべりが大好きで・・・

自分の小屋に小鳥が遊びに来るたびに、

『メエ、メエ』と嬉しそうに言葉を通わせていた。

気がつけば、フェンリルは動物たちの中で人気者として生きていた。母に酷く叱られ、落ち込んだ時に、言葉は通じないけれど、

優しくほお擦りして、慰めてくれた。

一緒にふさふさの芝生に寝転んで、空も眺めた。  
自分の口笛に合わせて、歌も歌った。

そんな大切な家族の一員であるフェンリルが・・・

血まみれの無残な状態で倒れている。

何度も名を読んだが、決して起き上がらない。  
顔も上げない。手足も動かさない。

もう、もう・・・

フェンリルは・・・

還らぬ者となってしまうのか…？

## 第0章 - 悲劇の幕開け 1 (後書き)

続きが気になるパターン(?)で書いてみましたが・・・  
イメージが膨らみすぎて、逆にまとまらなくなつて、  
自分が想像していたものと少々変わってしまった^^；  
ですが、そこそこ読み応えがあると思います。

これからも全力を出し切つて書いていきたいと思ひます、  
\*感想など募集していますので、お気軽にどうぞ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3470m/>

---

キミと共に ...

2010年10月22日13時19分発行